

美濃地方の御物石器の資料紹介

坂口浩之

An Introduction of Stone Artifacts "GYOBUTSU-SEKKI" in Mino Province

Hiroshi SAKAGUCHI

1 はじめに

岐阜県には、飛騨地方を中心として、縄文時代晩期の御物石器とよばれる特殊な形態をもつ石製品が数多く出土している。しかし、資料の半数を占める飛騨地方でも表採資料が多く、年代を比定できる資料が少ない。型式学的な編年研究は早くから行われているが、現状ではその出自や用途についてはなお不明な点が多い。(註1)

以下に紹介する美濃地方の2例は、いずれも発掘調査によらないものであるが、加茂郡富加町、恵那郡岩村町はいずれもこれまで分布のみられなかった地域であるので、新しい事例として紹介しておきたい。なお、各部の名称は増子誠氏の「御物石器の基礎的研究」(1996)にならった。

2 富加町高畑北野の採集資料について

本資料は、平成9年に加茂郡富加町高畑北野の津保川の川原で、同町の東山熙氏によって発見され、当館に寄贈されたものである。長良川流域は、美濃地方の中でも御物石器が多く分布する地域であるが、美並村以北の本流域に偏在しており、支流である津保川流域には事例が見られなかった。発見地周辺の縄文時代の遺跡としては海老山遺跡と北野遺跡があるが、本資料との関係はよくわかっていない。(註2)

本資料の形態は、上部に突起があり、橋本正氏の分類によれば濃飛型角付棒状頭式に相当し、大門寺資料(河合村)に似る。(註3)安山岩の川原石を用い、敲打して作られており、断面形は三角形をなす。法量は次のとおりである。(全長には上部突起も含む。以下同)

全長	26.5cm	最大幅	7.6cm
上部高さ	9.3cm	挟り部高さ	5.5cm

挟り部は上方に大きく寄っており、下部が全長の半分を占める。裏面に川原石の自然面が残るがほぼ平らである。文様は全体に退化しており、明確なものが少ない。

上部突起は側面部がくぼんでおり、正面から見ると上部から上部突起の先端にかけて稜線が走っている。側面

部のくぼみには直径約2cmの円形の隆起があって、不完全ながら玉抱き三叉文状の文様とみられる。(註4)上部の側面は全体に隆起しているが、文様は見られない。また、下部側面には周囲を区画するように隆起帯がめぐっているが、区画の内側は平滑で、文様は見られない。なお、下方部の端には縦に約3.5cmのくぼみがある。時期は晩期中葉と思われる。

3 岩村町内採集資料について

本資料は、恵那郡岩村町の歴史資料館に保管されているものである。昭和初期に同町内で採集されたと伝えられるが、詳細は不明である。東濃地方は、これまで恵那市笠置町の森腰遺跡、恵那郡福岡町の下島遺跡、恵那郡串原村の木根知区から出土した3例が知られているのみで、御物石器の分布の少ない地域である。(註5)

本資料は、長さが30cmを越える大型のもので、結晶片岩の長楕円礫を敲打して作られている。(註6)上部突起があり、橋本分類では濃飛型角付棒状頭式に相当するが、全体に細長いプロポーションである。文様はほとんど退化している。裏面は平らに摺られており、安定して置くことができる。なお、本資料は上部突起左側に小損があり、下部裏面が大きく欠損している。法量は次のとおりである。

全長	31.5cm	最大幅	9.5cm
上部高さ	10.5cm	挟り部高さ	7.5cm

上部は半球状に大きく盛り上がっており、研磨もしくは手摺れにより表面がなめらかである。上部側面には敲打痕が顕著である。(註7)下部は上部に比べて低く、挟り部との段差も顕著でない。下部は正面を細長く面取りし、左側面を集中的に敲打して整形している。下部裏面の欠損部は石の摂理にそって板状に割れているが、下方部の左側の割れ口に打撃痕がみられ、破断面全体に被熱と思われる黒っぽい痕跡がある。本資料は人為的に割られた可能性が考えられる。(註8)時期は晩期中葉と思われる。

なお、同町内出土と思われる石刀が同歴史資料館に保管されているので、紹介しておく。

石刀は刃部の先端を欠いているが、ほぼ完形で、残存長は31.5cm、やや内反りで、ていねいに研磨されている。刀身は中ほどで幅3.0cm、厚さ1.8cmである。柄部は三角形を呈し、両側面に粗雑な浅い抉りが入っているが、他に文様らしいものは見られない。

註

- 1 橋本正氏の「御物石器論」(『大境』第6号, 1976)以後、擦るという操作がともなう摩擦器形祭器としての位置づけが一般になされているが、近年、技術的な検討により「擦痕」を製作時の研磨の課程として認識する増子誠氏の論考が出されている。(増子誠「御物石器の基礎的研究」『筑波大学先史学・考古学研究』第7号, 1996)
- 2 発見者の東山氏によると、津保川左岸の川原で川原石の中に置かれたような状態で発見したという。発見地とは山ををさんで反対側に位置する海老山遺跡からは晩期の土器が、北野遺跡からは石剣・石刀の類が出土している。(『岐阜県史』通史編原

始, 1972) 本資料が上流から流されてきた可能性もあるが、損傷や摩耗が少ないことから、川の中にあった期間は長くないものと思われる。

- 3 吉朝則富氏のご教示による。
- 4 増子誠氏のご教示による。
- 5 安江赳夫氏は加茂郡白川町の瀬之上遺跡例も数えている(『福岡町史』通史編上巻, 1986)が、ここでは含めない。
- 6 岩石の種類の見定は当館の鹿野勘次、安藤善之による。結晶片岩は中央構造線沿いに分布し、東濃では産出しない。
- 7 増子氏によると、敲打痕が文様である可能性もあるという。
- 8 大野郡宮川村の家ノ下遺跡の出土例では、火を受けて破片となった例があり、儀礼・祭祀での使用が考えられている。(宮川村教育委員会『国道360号線バイパス改修工事に伴う発掘調査概報』, 1995)

追記 本稿をなすに当たっては、林直樹氏、増子誠氏、吉朝則富氏から多大なご指導をいただきました。また、資料の実見には岩村町歴史資料館に便宜を頂きました。記して謝意を申し上げます。

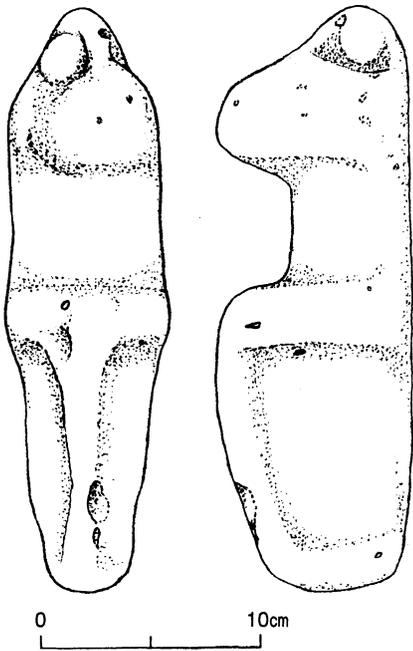


図1 富加町高畑北野採集資料

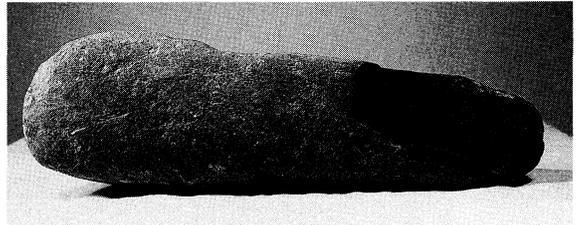
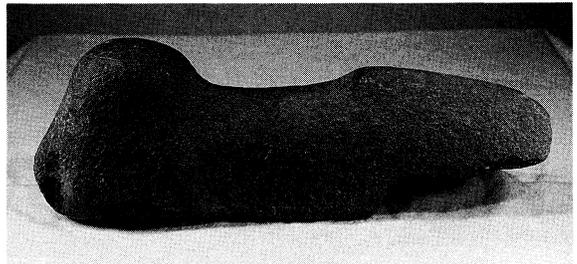
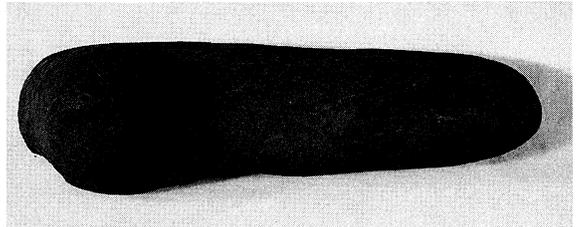
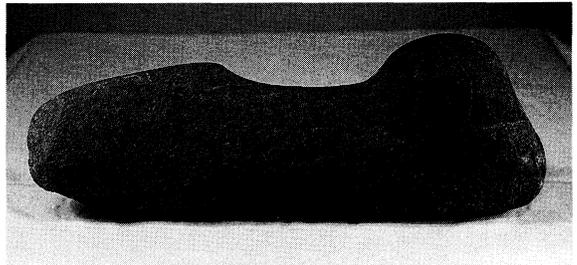


写真3～6 岩村町内採集資料

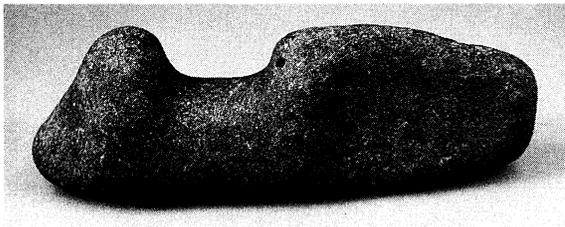
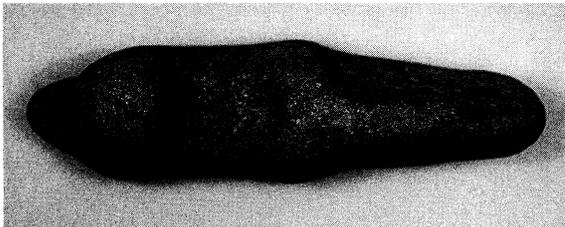


写真1・2 富加町高畑北野採集資料

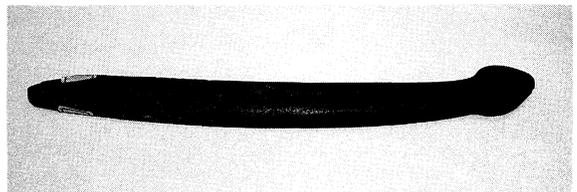


写真7 岩村町内採集の石刀